

台東区における仏壇産業の歴史と現状

上 坂 円

台東区は、上野と浅草という2つの観光地を持ち、東京の下町として発展してきた。台東区の歴史は、江戸時代の市街化拡大により寺院が区内に移転し、門前町として栄えたのが始まりである。その後、商業においては特に卸売業が集積し、工業においては伝統的な技術を持つ手工業的製造業という特色を持ちながら、商業・工業の町として今日に至っている。

しかし、現在の台東区は、地価高騰による人口流出、工場移転及び人手不足等によってその地域構造を変化させつつある。

本論では、このような台東区の変化を、仏壇産業というひとつの伝統産業の変化を論じることで捉えてみたい。

研究の方法としては、統計資料、地図、文献の調査とフィールドワークによる聞き取り調査を中心とする。

東京仏壇は、江戸時代元禄初期、江戸の指物師が仕事の合い間に、桑や榲などの堅木材を使って良質で飾りの少ない仏壇を作ったのが始まりといわれている。

明暦の大火後、幕府の都市政策、地価の高騰により江戸市街地が拡大し、寺院が江戸下町（現日本橋周辺）からその頃江戸の郊外であった台東区に移転し始めた。現在の浅草通りは新寺通りと呼ばれ、寺院の周辺には門前町ができ大変賑わった。

江戸時代初期に幕府は仏教によって民衆を統制する為に寺壇制度等を義務づけたので、この頃になると仏事が一般庶民に普及していた。その後、門前町の支配が寺社奉行から町奉行に移管される頃になると、庶民に仏壇や仏具が広まった。

この様な時代を背景に、仏師や指物師といった渡り職人が江戸周辺を巡り仏壇づくりを仕事にするようになった。江戸時代後期には、新寺通りに

仏壇作りの職人たちが集住し、現在の浅草通り仏壇仏具街の起源となったらしい。その後、関東大震災、東京大空襲と2度にわたり被災した、台東区は、街の再編成をよぎなくされている。しかし、江戸後期にできた仏壇職集住という基礎があったこと、また早くから交通の便が良かったこと等を理由に戦後、職人から仏具商への転業、他業種からの転業、他地域からの参入等によって現在の問屋街的機能を持った浅草通りの仏壇仏具店街が形成された。

現在、東京仏壇製造業は減少傾向にあり、台東区においても、その工場数が1977年には39であったのが、1989年には5と激減している。地価高騰によって東京近県に移転した工場も多いが、転業した例もある。その理由としては、輸入原木の値上がり・入手難、人手不足により他産地にたいする競争力が低下したこと、企業として成功した大手仏壇工場の出現等が挙げられる。

今まで、仏壇製造業は、職人的小規模経営であるがゆえに市場環境の変化への対応力が乏しいという弱点を持っていた。しかしこの様な弱点にいち早く目を向け企業化に成功した者は、今日業界のリーダー的存在となっている。

このことは仏壇卸売業、小売業についてもいえることで、古い体質の商売方法を改め、自社の直営工場を持ったり、チェーン店化などを試みた企業は、着実に業績を伸ばしている。

この様な状況の中で、浅草通りの仏壇仏具店は問屋街的機能を持ち、かつては“仏壇店は、浅草通り以外では成立しない”といわれるほど、仏壇業界に影響力を持っていた。しかし、大規模な企業が東京の郊外にも出現するようになった現在では、他業種の卸売業、小売業と同様に、消費者のニーズに応じた経営が必要になってきている。